

二〇〇八年度大学入試センター試験 解説 〈現代文〉

第1問 評論文 狩野敏次「住居空間の心身論―『奥』の日本文化」

〔総括〕

全体的に例年とほぼ同じ設問構成で、レベルも基本～標準問題が多く並んだ。昨年同様、今年も対比構造の文章が出題されたが、今年は前半と後半で二つの対比を扱いながら論を進めている点が特徴的といえる。また、文中で文献を引用したり、具体例を挙げながら説明したりしている筆者の意図が、正確に読み切れたかどうか読解のポイントになる。

問1の漢字問題は例年並みで基本レベル。問2、4、5も基本レベルの問題。問3は解答の根拠が近くになく、傍線部自体の言い換えになっている点ややや難。問6の論の進め方を問う問題が、AとBの二つに分かれて問われているのが新傾向で、特にB群の選択肢が紛らわしく、やや難と言える。昨年のようなはつきりとした難問がないぶん、高得点を取ることが可能な問題構成であった。

〔解説〕

問1 漢字問題

どれも大学入試で出題頻度の高い基本的な漢字なので、日ごろから漢字の勉強をきちんとしている人は満点がとれたはずだ。(エ)のように一つの漢字を訓と音の両面から問う問題はセンターでは頻出なので、日ごろから多角的な漢字の勉強を心がけてほしい。

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|----------|-----|----------|-----|----------|-----|----------|-----|----------|-----|
| (ア) | 装 置 | ① | 搜 索 | ② | 騷 動 | ③ | 壮 健 | ④ | 服 装 | ⑤ | 地 層 |
| (イ) | 拍 車 | ① | 迫 力 | ② | 薄 情 | ③ | 拍 手 | ④ | 博 識 | ⑤ | 白 状 |
| (ウ) | 排 除 | ① | 輩 出 | ② | 排 斥 | ③ | 腐 敗 | ④ | 背 信 | ⑤ | 祝 杯 |
| (エ) | 踏 みしめ | ① | 舞 踏 | ② | 検 討 | ③ | 殺 到 | ④ | 凍 結 | ⑤ | 盜 難 |
| (オ) | 要 素 | ① | 祖 先 | ② | 租 税 | ③ | 素 朴 | ④ | 疎 遠 | ⑤ | 訴 訟 |
| 正解 | (ア) | 1 | (イ) | 2 | (ウ) | 3 | (エ) | 4 | (オ) | 5 | |
| | | ④ | | ③ | | ② | | ① | | ③ | |

問2 標準

傍線部A「闇は『明るい空間』とはまったく別の方法で私たちにはたらきかける」とあるが、そのはたらきかけは私たちにどのような状況をもたらすか。その説明として最も適当なものを選び。

夜の闇と昼の「明るい空間」との対比を論じた部分で、闇のはたらきかけについて問う問題。傍線部の前後で「明るい空間」との対比で闇のはたらきかけについて論じているので、傍線部の前後をまず読み、次に闇について論じられている部分を正確に読み切つて解答する。

○「明るい空間のなか」：視覚が優先し、その結果、他の身体感覚が抑制される。空間との間接的な関係を結ぶ。

○「闇のなか」：明るい空間のなかで抑制されていた身体感覚がよびさまされ、その身体感覚による空間把握が活発化する。私たちの身体は空間に直接触れ合い、空間が私たちの身体に浸透するように感じられる。闇のなかでは、私たちが空間はある共通の雰囲気に参加している。

こうした対比的内容を押さえれば、正解は①と決まる。②以下の選択肢を消去しておこう。

②は、結論部分の「共感的な体験も抑制させられる」が×。これは本文の内容の反対になる。

③は、前半部分は良いとしても、「もっぱら視覚的な効果によって」が×。これも反対の内容といえる。

④は、「空間と間接的な関係を結ぶ」が×。空間と間接的な関係を結ぶのは「明るい空間のなか」であり、闇のなかでの私たちの身体と空間との関係は、「直接触れ合い」「浸透する」関係である。

⑤は前半の「視覚のもつ距離の感覚がいつそう鋭敏になり」が×。本文の内容と反対になっている。

正解 ①

6

問3 やや難

傍線部B「視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選び。

かつては存在した、「深さ」という身体全体に浸透する共感的な体験を失っていく過程を説明した段落の中で問われている問題。「明るい空間」「近代の空間」が実現するにつれ、「視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ」わけだが、つまりこれはどういうことだろうか。

そこで傍線部の前後を読むが、傍線部の説明に該当する記述が見つからない。実はこの問題は、傍線部自体を言い換えて正しく説明してある選択肢を選ぶ問題になっている。これは、センター現代文で、時折出題される傾向の問題なので、来年度以降の対策という意味でも押さえておきたいところだ。

○傍線部B

視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ

②身体感覚相互の優劣関係が

視覚を軸にするかたち

統御されてきた

こうしてみるとわかるように、選択肢②の各要素が、傍線部Bの言い換えになっていることがわかる。②の「身体感覚相互の優劣関係」で×にした人がいたかもしれないが、「明るい空間」によって「闇」が失われる過程において、「視覚が優先し、他の身体感覚が抑制される」と本文に書かれている(傍線部Aの直後)ので、ここは「優劣関係」と言っても問題ない。

他の選択肢を消去しておこう。

①は、「視覚が、身体感覚の中に吸収されるようになってきた」の箇所がまったく逆の内容で×。

③は、「人為的な力によって退化を余儀なくされてきた」が×。視覚以外の身体感覚が「退化」させられたのではなく、近代に入り、視覚が優位に立ち、身体感覚全体を統御しはじめたというのが正しい。

④は、なんとなく合っているように思い、選んでしまう人もいると思われる選択肢だが、先ほどの説明どおり、傍線部の説明として正しく言い換えられていないところに注意してほしい。まず、「視覚だけ」とあるところが×。「視覚を『中心』にした」のであって「だけ」と限定はできない。次に、「独占する」も同様に×。「独占」ではなく、視覚を中心にして「制度化」し「統御」したのである。

⑤は、「人々が自発的に享受する」が本文に書かれていない内容で×。

正解

7

②

問4 基本

傍線部C「奥は空間的、時間的、心理的なさまざまな意味を含みながらひろく日本の文化を支えている」とあるが、その「奥」の例として、筆者は神社の参道を挙げてている。神社の参道における体験のどのような点に筆者は注目しているか。その説明として最も適当なものを選べ。

日本の文化を支えている「奥」を説明するにあたり、「参道」を例として考察に入っている箇所に関しての問題。昨年は「龍安寺の石庭」が例として挙げられ、それについて説明されていた箇所が問題になっていたが、それと似た傾向の問題といえる。

ここでは傍線部以下の内容を読み進め、「参道」体験の文化的な意味を正確に押さえて選択肢と比較して解く。「神社の参道における体験」のポイントとしては、

1 曲がりくねった参道を踏みしめながら歩いて行くときの精神の高揚と、聖なるものに近づいていくような感じをいざとときに感じるものが「奥」であるという点。

2 奥は最終的な建物ではなく、そこへいたるまでのプロセスを造形化したものである点。

この二つを本文から読み取って押さえておこう。では、選択肢を見ていこう。

①は、後半の「そこにいたるまでの神社独特の距離の長さを実感できる点」が×。ここでは「距離の長さ」の「実感」が問題ではない。

②は、「信仰の対象である鎮守の森」「信仰を求める心が優しく包み込まれている」が×。どちらも参道の体験として書かれている本文の内容に対応していない。

③は、前述した二つのポイントのうち一番目の内容が押さえられているので、○。ただし、二番目のポイントである「プロセス」の内容がないので、一気に正解としないこと。選択肢⑤まで見て、確実に消去したのち、戻ってこの③を正解として選んでほしい。

④は、「自然と人間の精神とが調和した環境」が×。本文に書かれていない内容だ。

⑤は、前述の二番目のポイントである「プロセス」の話になっているが、「建物である正殿」「正殿の中の鏡に向き合うこと」の部分で×。「建物ではなく」という本文に反するところを見落とさないでほしい。

正解 8 ③

問5 基本

傍線部D「案内された瞬間から、すでに奥の空間体験がはじまっている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

「奥」について書かれた槇文彦氏の論稿を引用した後、それを解説している箇所に引かれた傍線。先ほどの問4で二つ目のポイントとしてあげた

「プロセス」が話の中心になっていることをつかめば解答は容易。

傍線部の直前に、「奥は純粋に空間的な意味での奥行ではなく、目的へ向かうプロセスの演出によって私たちの心のなかに生じる心理的な距離感であり、時間感覚である」とあるところを押さえる。その説明になっている選択肢は、①。また、①に書かれている、「奥」が空間的にも時間的にも到達しがたいものであることの説明は、傍線部Cの一行前に書かれているところも押さえてほしい。本文ではカタカナ語で出てきている「プロセス」を、選択肢では「過程」と日本語に置き換えているところも見落とさないこと。センター現代文では、こうしたカタカナ語を日本語に直して選択肢に置いている場合があるので注意したい。その意味では、「語彙力」を問う問題ともいえる。

他の選択肢を消去していこう。

②は、後半の「明確に限定された時間としても感じる」という記述はない。

③は、「数量に還元できる対象」とあるのが×。「奥」は「数量に還元」できるものではない。

④は、「案内する側とされる側が同じ対象物をめざして一体感をもつ」とあるが、本文には「一体感」の説明はなく、×。また、その一体感をもつことで、「親密な距離や時間として感じる」という説明も不可。傍線部の直前に、「奥へどうぞ」という言葉は、「案内する側とされる側の両者の心のなかの原点にむかって行く」というニュアンスがある」と書かれているが、選択肢にあるような「一体感」や「親密な」という内容にはなっていないことに注意。

⑤は、「神秘的な儀式が行われている空間」「人知を超えた心理的な距離や時間として感じる」が×。本文ではそうした記述がない。

正解 9 ①

問6 A標準 B基本

この文章では論を進めるうえで、具体的な事例を挙げたり、他の文献を取り上げたりしている。筆者がそのような論の進め方をする意図の説明として最も適当なものを、次のA群・B群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

二〇〇六年、二〇〇七年に引き続き、「論の進め方の意図の説明」を求める問題になっている。二〇〇五年までは、評論文の最後の問題は「内容一致」が主であったので、新課程になってからは、これで三年連続して論の進め方・本文の展開、といったものに焦点が当てられている。ただし、今年度は、内容を大きく二つに分けて問いかけている点特徴的だ。

こうした論の進め方の問題は、基本的に選択肢を読み、比較しながら消去していく形で解いていくのがやり方としては正しい。では、見ていこう。

A群

まず、「ヒロテイ、連続窓等の例」が何のために挙げられているかということ本文に求めると、近代建築がめざしてきた「闇の追放」「明るい空間の実現」の例として挙げられていることがわかる。その点で、①と②は消去できる。

次に、③と④を比較すると、③の「空間の均質化」、④の「深さ」という次元を失ってしまった」という内容は本文に書かれているのでどちらもOKとなり、ポイントは③「問題点を引き出すため」と、④「誤りの重大さを証明するため」の箇所に絞られる。本文を読むと、均質化された近代の空間には奥行きが存在しない、とは書かれていても、深さが失われたことが重大な誤りだとは書かれていない。したがって④が×となり、正解は③。

B群

A群とちがって、選択肢に具体的な例として挙げられているもの自体が違うので、一つずつ正確に見ていく必要がある。

①は、「ミンコフスキーの文章」を引用した意図の説明になっているが、ミンコフスキーの文章で語られているのは「闇」の積極的な価値なのであって、選択肢にあるような「近代における西洋と伝統的な日本とのあいだの、空間のとらえ方の違い」ではない。したがって×。この①が消去できるかどうか、ポイントになる。

②は、「日本語の固有な奥の意味」が「辞書などでは表しきれない」ことの証明とあるが、本文で辞書の引用がしていることの意味は、あくまで「奥」という単語の説明のためなので、×。

③の説明だと、筆者が上田篤と対立した意見の持ち主だということになるが、筆者は上田篤の意見に賛同しているから、×。

④は、特に問題なく正しい説明になっており、これが正解。「先駆的な論」については、本文では「最初のまとまった論稿」とありOK。また、最終段落を読んでいけばわかるように、榎文彦氏の文章を取り上げつつ解説を加えており、その目的は「自説の説得力を高めるため」と言える。

正解 A群

10

③

B群

11

④

第2問 小説文 夏目漱石『彼岸過迄』

〔総括〕

センターで出題歴のある夏目漱石の文章であり、作品としても有名なものであるが、明治から大正にかけて書かれた文章だけに、今の受験生にはとらえづらい文体・内容であった。それゆえ解答するのに時間がかかった人も多かったのではないだろうか。

問1の語句問題は慣用表現の意味を問うものでやや難。問2、3、4、5はいずれも基本レベルだが、内容的に読み切れなかった受験生は連続してミスをする可能性が高い。その意味で、今年の問題は出来不出来の差が激しいものだったと予想される。問6の「表現の特徴」を問う問題は、正解を二つ選ぶものだったが、選択肢を正確に分析して解答する力が問われている問題で、やや難といえる。

問1 語句問題

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろから慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。

(ア)の「名状し難い」は、④「何とも言い表しようのない」が正解。文脈的には、他の選択肢も当てはまるように思えるが、どれも辞書的な意味を正確に押さえていないので×になる。

(イ)の「眉を暗くした」は、あまり見えない慣用表現だが、これは文脈判断でも正解できる。「僕」が「高木」に対して「不快感」を持っていることは本文中に何度も書かれているので、正解は④の「不愉快に思い表情をくもらせた」とわかる。直前に「ますます」とあるのがヒントで、「僕」の感情を押さえていき、どういう気持ちか「ますます」増大したかを判断すればよい。

(ウ)の「気の置けない」は、よく間違える慣用表現として有名なもので、正解は②「遠慮しないで気楽につきあえる」。「ない」という打消し表現に惑わされて、④の「気を遣ってくつろぐことのない」を選ばないこと。「気の置けない人」というのは、つまり「気を遣わないでよい人」という意味で、「気楽につきあえる人」を意味する。文脈的にも、直後に「いたって行き届いた人らしい」とあるところから、マイナス的印象の語句ではないことがわかる。

正解 (ア) 12 (イ) 13 (ウ) 14 ②

問2 標準

傍線部A「この男は生まれるや否や交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人となったのだと評したかった」とあるが、そのように高木を評する「僕」の思いを説明したものととして最も適当なものを選べ。

「僕」の心情を問う問題。ここでのポイントは、まず「僕」が高木という男性に対してどういう思いを抱いたかということを押さえ、次に「交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人となったのだ」という表現の意味するところを正しく解釈することだ。

まず、「僕」の高木に対する思いを見ていこう。好青年であり、会話上手な高木に対して僕が抱いた感情は、「羨ましい」「不愉快」「憎み出した」「嫉妬」という言葉で本文に書かれている。そこで選択肢を見ると、すべての選択肢が「僕」のそうした思いを押さえている。ただし、「羨ましい」と思ったのは「彼の容貌を見た」ことよってであり、選択肢①のように、「家族のように親しげに周囲の人の名を呼ぶ」ことが原因ではないので×。次に、「交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人となったのだ」という表現の意味するところだが、これは傍線部の前後にもあるように、高木の応対振りの上手さと、会話を支配する様子を比喩的に表現したもので、そうした点を押さえている②が正解とわかる。

③の「おしつけがましい」態度と、⑤の「自分をよく見せる作威的な振る舞い」については、傍線部のあとに書かれている内容だが、本文に「だんだん彼を観察しているうちに」とあるように、「僕」の思いが変化していくにつれて出てくる感想であり、まだ傍線部の段階での「僕」の思いとしては不適。また「交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人となったのだ」という表現の意味するところの説明としても合わないので×。

④は、「完全無欠な態度」が本文にはなく、×。

正解

15

②

問3 基本

傍線部B「僕をして執念く美しい人に附纏わせないものは、まさにこの酒に棄てられた淋しみの障害に過ぎない」とあるが、この部分で「僕」は自分をどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを選べ。

この問題はまず、傍線部中の指示語を正確にたどることが大切で、「この酒に棄てられた淋しみ」の「この」が何を指しているかをとらえる。

「この」が指しているのは、直前の内容であり、それは「その顔とその着物がどうかなく変化し得るかをすぐ予想して、酔いが去って急にぞっとする人の浅ましさを覚える」と書かれている箇所当たると、わかりやすく言い換えると、「美しい若い女性がいて気になったとしても、時の経過とと

もに年老いていくのを想像してしまい、その気持ちがすぐに去ってしまう」となる。選択肢で、そうした説明をしてあるものは、⑤しかなく、これが正解。

他の選択肢は、「女性の美しさが時の経過とともに衰えていく」という指示語で指し示された説明が入っていないので×。

評論に限らず、小説においても傍線部中に「指示語」があれば、それが指し示すものを押さえたうえで解答するというのはセンター現代文で頻出のパターンだ。

正解 16 ⑤

問4 基本

傍線部C「僕はどうしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした」とあるが、なぜ「僕」はこのような気持ちになったのか。その理由として最も適当なものを選べ。

傍線部の直前に「そうして〜と思った時」とあるところを見落とさずチェックすることが大切。直前に書かれている内容が、傍線部の原因になっている。

ここで傍線部Cの気持ちにいたる流れを押さえよう。今まで、「嫉妬心」などと無縁だった僕が、「眼の当たりにこの高木という男を見」てしまったがゆえに、「名状し難い不快」を覚え、そして「自分の所有でもない、また所有にする気もない千代子が原因で、この嫉妬心が燃え出したのだ」と思った」という流れだ。

こうした流れを押さえている選択肢は②で、これが正解。②は傍線部の「僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした」の説明として、「そうした感情（＝嫉妬心）を制御しない限り、自分を卑しめることになるような気がした」と書かれており、この説明も正しい。

残りの選択肢では、「千代子」についてまったく触れられていない⑤が×、また逆に「千代子を愛しているのではないかと考えはじめた」とある③も間違ったとらえ方なので×。①の「千代子に高木と比較されたという思い」、④の「千代子を恋人として扱う高木」も本文に書かれていない内容で×。

正解 17 ②

問5 標準

傍線部D「僕が僕の占いの的中しなかったのを、母のために喜んだのは事実である。同時に同じ出来事が僕を焦燥しがらせたのも嘘ではない」とあるが、この部分での「僕」の心情はどのようなものと考えられるか。その説明として最も適当なものを選べ。

文章全体のほぼ最後の部分に引かれている傍線についての問題。そこまでの話の流れを押さえつつ、選択肢を要素に分けて正解を探し、残りの選択肢を消去していくスタイルで解こう。

①は、各要素とも本文の内容を正確に押さえており、問題なしでこれが正解。ただし、他の選択肢を必ず確認し、消去することも忘れないようにしてほしい。

②は、「母の驚きや動揺に配慮した叔母」とあるのが×。本文にはそうした叔母の配慮についての記述はない。

③は、「内心では高木が千代子の結婚相手になるのもやむを得ないと考えている母」が×。本文には母がそう考えているとは書かれておらず、僕が母の気持ちを推測している内容が書かれているにすぎない。また、「高木と比べると千代子の結婚相手として劣る」のは事実かもしれないが、そうした自分に対して「じれったさを感じている」というのが傍線部の説明としては不適。正解の①の書かれているように、ここで僕を「焦燥しがらせているのは、「縁談の可能性が消えないまま、どっちつかずの状況に留まる」ことに対する「いらだち」である。

④は、やや迷う選択肢だが、「母が高木に好印象を持ったことを察した叔母」はいいとしても、「そのことに乗じて」「縁談を持ち出す」は言い過ぎで、また「母の抱いた印象が『僕』と高木とを比較した結果でもある」という書き方も、本文では「僕」の推測にすぎないものなので、断定するには無理がある。決定的なミスとしては、傍線部の「同時に同じ出来事が僕を焦燥しがらせたのも嘘ではない」についての説明がないことで、×。

⑤は、後半の「千代子と結婚する意志のないまま母を欺き通さなければならぬ」「歯がゆさ」が×。

正解 18 ①

問6 やや難

この文章における表現の特徴についての説明として適当なものを次のうちから二つ選べ。

新課程になってから、小説の最後の問題はこうした「表現の特徴」について問うものが連続して出題されている。今年は「二つ」選ぶところが特徴的だ。解法としては、選択肢を要素に分けて○×を付け、基本的に消去法で解くのが確実。また、選択肢同士を比較して解くという視点も有効だ。

①は、「『僕』の心情の描写よりも」以下の説明が×。本文の内容は、事実と「僕」の心情の描写が中心になっている。
②は、この本文が過去の回想であることについて触れている点で正しく、また「『僕』の心情や行動について原因や理由を明らかにしながら描いている」という説明も、本文の内容構成に照らしてみても合っている。この②が一つ目の正解になるが、ここで②を正解とすることにおいて、次の③が×になるという判断が大切だ。

③を解くうえで、②との比較が大切。③では「現在においても、『僕』の内面の混乱が整理されないまま未だに続いている」とあるが、これは②の内容に反する。②では「出来事全体を見渡せる『今』の立場から原因や理由を明らかにしながら描いている」とあるように、過去を回想するに当たって、すでに僕の内面の混乱は整理されているという説明であり、こちらが正しい。その点で、次の④を選ぶ際には、②と③の比較で②を正しいと判断できたかどうか問われていることになる。

④で「漢語」「概念的な言葉」とあるのは、少しひっかかるが×にはならない。そして、「『僕』が自分の心情を対象化し分析的にとらえようとしている」とある部分は、先ほど説明した②の内容と連動しており、本文の表現特徴を表しているので○となる。これが二つ目の正解だ。

⑤は、「『僕』の屈折したユーモアを示している」とは言えず、×。全体的に「僕」をユーモアのある人物として描いている箇所は本文からは読み取れない。

⑥は、「擬人法を用いることで、『僕』が抽象的なものごとをわかりやすく説明しようとしている」が×。確かに、引用されている箇所は擬人法と言えるが、それによって「わかりやすく説明しようとしている」とは取れない。むしろ、正解である④のように、自分を「対象化」している表現の例とも言える。

正解

19

20

②

④